

## カタツムリの家を作ろう ~友達と感じたことや考えたことを伝え合って~ 刈谷市立井ヶ谷幼稚園 (愛知県刈谷市) [5歳児]

### 見たり触ったりして感動する

6月に入ると「途中で見つけたんだよ」とうれしそうに登園時に見つけたカタツムリを見せてくれたり、園内の草花の所でアマガエルを見つけたりする幼児の姿が見られるようになってきた。雨上がりの日も登園するとすぐに、ふたつきのパックを持ち、カタツムリやカエルなど虫探しに出かけた。虫を見つけることに一生懸命で、プランターの花の中をじっと見つめる様子が見られた。  
<保育者の願>カタツムリの生態により親しみもてるように、透明で大きな飼育ケースを用意し、世話する中で、見たり触ったりした感動や発見のおもしろさを味わわせたい。

飼育ケースの中のカタツムリの様子を見て、気付いたことを話す。そのうち、触ると目がなくなることやケースについている腹が動く様子などに興味をもってかかわる。保育者と手にのせてみる。

<幼児の姿>

B児「冷たくて気持ちいい!」と驚く。教師は「冷たいね」と微笑み返す。A児も手に乗せて「手が濡れた!ちょっとくすぐったいね」と言い、F児と顔を見合わせて笑う。すると「わあ、目がすごく伸びた!」「これが一番長く伸びたよ」などと教師にうれしそうに言う。

### 自分の知っていることを言い合い、カタツムリの家を作る

<保育者の願>部屋に置いてある飼育ケースの所でカタツムリを見たり触ったり、カタツムリの本を一緒に見たりして遊ぶ姿が見られる。飼育ケースの中にはカタツムリしか入っておらず、自分の身に置き換えてカタツムリが心地よく住める環境について気付き、どうするとよいか考えていってほしい。

C児、D児、E児は飼育ケースの所でカタツムリを見たり触ったりしている。そこで、保育者はカタツムリがどういうところにいるのか話題にすると、「土や葉っぱの所にいるよ」「隠れてるんだよ」「あと濡れた所にもいる」「雨が好きだから雨だとよくいるよ」と顔を見合わせながら言う。保育者が「このカタツムリは何もない所にいるんだね」とつぶやくと、C児が「土とか入れてあげたらいいんじゃない?!」と言い、本棚の所からカタツムリの本を持ってきて何やら探し始める。友達と目当てのページを開き、3人は頭を突き合わせて見入っている。

3人は飼育ケースと本を持って外に出かける。C児「土を入れてあげようよ」D児「葉っぱも入れてあげよう」とやりとりをし、C児が「先生、どこの土を入れるの?」と言う。保育者が「う~ん、どこがいいのかな?どこでカタツムリを見つけた?」と問いかけると、C児「あっちで見つけた」E児「そうだ、あっちの畑で入れよう」と言って走って向かう。早速3人は土を入れ始め、E児「これぐらいでいいかな?」と言うと、C児は本と比べながら「もうちょっとだね、うん、それぐらいでいいよ」と答える。

D児も土を入れようと掘っていると、土の中から竹が半分に割れたものを見つけ「あ!いいのを見つけた。これ、カタツムリの道になるんじゃないかな?入れてあげようよ」と言う。それを受けてE児「いいね。ここを登って遊べるよ」C児「この枝も入れてあげようよ」とそばに落ちていた枝をケースの中に立てかける。「これでできあがり」と言い、3人は本と同じようにできたことで、満足気な表情で飼育ケースを持って部屋に戻って行く。



### うちでいっぱいカタツムリの家を、どうすればよいか考える

<保育者の願>カタツムリのうちの色がえさの色と同じということを発見し、興味をもっているいるな食べ物を持ってきては与えるという日々が続いた。しかし、何日も経つと飼育ケースの中はうちでいっぱいになってしまった。カタツムリを飼い始めたころと比べると、触って遊んだり見たりする姿がだんだん減ってきていた。カタツムリの様子を見て、どうするとよいか考えたり気付いたりしてほしい

保育者がF児がにんじんとかぼちゃを持ってきてカタツムリにあげていたと話すと、「知ってる」「黄色いうんちをするんだよね」「にんじんはオレンジだったよ」などと近くの友達や保育者と話す。保育者が「そうだね。カタツムリは、食べたご飯の色のうんちをするんだよね。不思議だよ。でも先生ね、今日カタツムリのおうちを見ていて思ったことがあるんだよね」と少し困った様子で話す。すると、幼児らは近くの友達と話し始める。F児「いろんな色のうんちがあったよ」G児「うんちがいっぱいだった」F児「うん、いっぱいだった」と言う。保育者が「う~ん、どうするといいのかなあ」と考える姿を見せると、G児「きれいにするといいんじゃない?」C児「おね、掃除してあげるよ」R児「いいねえ、そうしようよ」と言い、周りの幼児らも友達と顔を見合わせずうなずいたり「いいね」と言ったりしている。

給食後、K児はT児らに声をかけてカタツムリを全部取り出して土を入れ替えたり、新しく枝を入れたりしている。

### <考 察>

カタツムリを通して、幼児らは様々な感動体験をしたり考える経験をしたりすることができた。自分で実際に体験することで、大きな喜びや驚き、感動を味わうことができる。また、教師自身も幼児と同じように体験することは、共感したり周りの幼児に知らせたり、興味づけをしたりすることもでき、大切なことである。

5歳児は、自分で考えようとする力を持っているものの、その力を引き出すきっかけを必要としていると思った。教師は幼児がいろいろと思いを巡らすことができるように、「どうするといいのかな?」と投げかけたり、一緒に考える姿を見せたりする働きかけが大切であると思う。

自然を通して、幼児らは好奇心をくすぐられ様々なことを経験したり、考えたりすることができるので、自然との触れ合いがたくさんできるように、教師自身意識して保育に取り入れることが大切なことだと思った。

### みどころ

同様の興味と一緒に活動する友達と、カタツムリに触れた快感や喜びを共感したことから、カタツムリは親しみのある共通の興味の対象になっています。また、カタツムリの住み家を作ったりきれいにしたりするために、考えを出し合い、協力して活動をしています。その時保育者が願いをもち、子どもたちが疑問や問題を感じるきっかけになる言葉をかけることで、子ども同士が同様の思いで課題を感じて考え、話し合っ解決しています。そして、自分たちの活動に満足感や有能感も共感することができました。こうした協同的な取り組みにより、「科学する心」が育まれています。